P－29

乳歯過剰歯の２例

○逢坂　亘彦
くすのき子供歯科

【緒言】

乳歯過剰歯は永久歯過剰歯に比べるときわめて少なく、その多くは上顎前歯部に出現する。今回、乳歯過剰歯と共に永久歯過剰歯を有したもの、双生歯として出現した乳歯過剰歯の２例を経験したので報告する。

なお、発表にあたり保護者の同意を得た。

【症例１】

患児　　Ｈ．Ｔ　女児
生年月日　平成19年11月19日
初診日　　平成21年11月４日（１歳11か月）

口腔内診査を主訴に来院した。診査の結果、上顎左側乳側切歯部に乳歯過剰歯を認めた。その後定期健診を行いながら平成23年12月、平成24年12月にデンタルエックス線写真を撮影、この時永久歯過剰歯も有る事が判明した。平成27年１月にパノラマエックス線写真を撮影した。

【症例２】

患児　　Ｓ．Ｋ　男児
生年月日　平成22年６月19日
初診日　　平成25年11月８日（３歳４か月）

齲蝕の治療を主訴に来院した。上顎左側乳側切歯部の双生歯に齲蝕が有ったのでレジンで修復した。その後は他の部位の齲蝕治療を進めていった。診療に対する拒絶が強くデンタルエックス線写真の撮影ができたのは平成27年２月である。

【考察】

乳歯過剰歯の多くは上顎前歯部に出現する。
症例1,２共に上顎前歯部に見られた。
症例１は乳歯過剰歯と永久過剰歯が同時に出現した。出現率は約30％である。後継永久歯のどちらが過剰歯か判別するためにCT撮影を行い形状から判別できないかと考えている。
症例２は乳歯過剰の成因として多くの研究者に支持されているのは歯胚の分裂または過形成説である。これに基づき症例２は双生歯と判断した。過去の文献では双生歯の報告は少ない。理由として、真性乳歯過剰歯の報告が多く、双生歯はそれほど注目されなかったためと考える。

【結論】

上顎左側側切歯部に出現した乳歯過剰歯の２例について報告した。
症例１、乳歯過剰歯が多く見られる上顎前歯部に出現し、永久歯過剰歯を伴っていた。
症例２、多くの研究者に認められている歯胚の分裂または過形成説に基づき双生歯であると判断した。

P－30

埋伏した上顎犬歯を萌出誘導した1症例

○一木　数由
門司歯科医院

【緒言】

今回演者は埋伏した上顎左側犬歯の萌出誘導を行ったので報告する。

【症例】

患者は初診時13歳女児で、学校健診で指摘されたむし歯の治療を主訴として来院。パノラマエックス線画像にて、左上顎犬歯の埋伏が認められた。CT撮影の結果、埋伏犬歯は側切歯の歯根端に位置し、歯冠を口蓋方向に向けて埋伏していた。
埋伏犬歯を萌出させるスペースがないので、口腔外科医に相談。その結果埋伏犬歯を抜歯すると、側切歯歯根を傷つけるおそれがあると診断。そこで側切歯を抜歯して、そのスペースに埋伏歯を牽引誘導することとした

【処置】

右上下第二大臼歯のシザースバイトを顎間ゴムで改善した後、上顎の歯牙にブラケットを装着した。その後、左上顎側切歯を抜歯。自然放出を待ったが認められなかったため、埋伏犬歯部を開窓しブラケットを装着、牽引を行った。
開窓後、犬歯は約6ヶ月で歯列内に誘導され、角ワイヤーにてレベリングを行った。

【考察】

埋伏永久歯の処置は発見が早ければ乳歯の抜歯などの処置で正しい位置への萌出誘導が行える場合もある。
今回は萌出スペースや埋伏歯の位置の問題もあり側切歯の抜歯処置を行った。もっと発見が早ければ側切歯の抜歯を行うことなく処置できたかもしれない。そのため健診による早期発見の必要性が示唆された